新たなまちへ①

南三陸さんさん商店街の歩み　笑顔がさんさんと輝く場所

▲仮設南三陸さんさん商店街のみんなで記念撮影。
決して笑顔を絶やさず、全国のみなさんに支えられながら町の復興を目指して歩み続けた。

津波ですべてが失われた無残な現実を前に、商店主たちは、当初、店の再建を想像することさえできなかった。しかし、震災直後から開催された南三陸福興市に集まった住民たちや、全国からやって来たボランティアのみなさんのあたたかい励ましに背中を押され、商店主たちは立ち上がった。2012（平成 24）年 2 月 25 日、仮設「南三陸さんさん商店街」が、吹雪の中、オープンした。

この商店街には 100 万人以上が訪れ、津波被災地で復興をめざす商店街の象徴的存在となってきた。2017（平成 29）年 3 月 3 日、かさ上げされたかつての志津川地区の中心部に、本設店舗が建築家の隈研吾氏の設計により、落成・開業した。飲食店や鮮魚店など、28 店舗での再出発となった。

▲かつての志津川地区中心部を 10m かさ上げした造成地に
2017（平成 29）年 3 月 3 日 本設の南三陸さんさん商店街がオープンした。

全国の支援者との交流を大切に育みながら、復興への道のりを歩み続けてきた商店主たち。2017（平成 29）年には経済産業省「がんばる商店街 30 選」に選出され、2019（平成 31）年日本ショッピングセンター協会第 8 回 SC 大賞において特別賞を受賞した。

感謝を胸に、心あたたまる商店街を目指し、今も商店主たちの奮闘は続いている。

新たなまちへ②

南三陸ハマーレ歌津の歩み 汐風に吹かれながら憩う場所

▲2012（平成 24）年 5 月 20 日仮設歌津伊里前福幸商店街でしろうおまつりが行われ
多くの町民たちと全国からの客でにぎわった。

歌津地区伊里前には、古くからの商店が旧国道沿いに軒を連ねていた。東日本大震災で伊里前湾を見下ろす国道 45 号バイパスの歌津大橋も大破。街並みは消えた。津波は指定避難場所だった高台の伊里前小学校の 1 階にまで達した。

商店主たちは、店を再建するに当たり、もう一度海を見渡せる伊里前で商いをしたいと、海のそばに 8 店舗から成るプレハブの仮設「歌津伊里前福幸商店街」を 2011（平成 23）年 12 月 13 日にオープンさせた。

▲2017（平成 29）年 4 月 23 日
南三陸ハマーレ歌津がオープンした。

以前の伊里前地区に約 7 m かさ上げされた土地に、建築家 隈研吾氏設計の、南三陸杉をふんだんに使った木造平屋建て 2 棟の本設商店街が建設された。

仮設商店街から移った 6 店と新たな 2 店が加わって、2017（平成 29）年 4 月 23 日に南三陸ハマーレ歌津がオープンした。商店街前のスペースでは、コンサートや季節毎の特産品を活かしたイベントなどが行われ、多くの人々でにぎわう。

新たなまちへ③

南三陸病院の再生

▲台湾紅十字会からの資金援助を受けて、高台にある志津川地区沼田の山林を切り拓き着工された南三陸病院・総合ケアセンター南三陸は、2015（平成 27）年 12 月 14 日に開院した。

家族や親戚を失った喪失感や、住む家を失った環境の劇的変化に、多くの住民が直面していたことから、住民の健康を守る医療福祉の復興は急務だった。悲しみと教訓の上に立ち、複合的な医療福祉施設 南三陸病院･総合ケアセンター南三陸が整備された。病院、保健センター、地域包括支援センター、訪問看護ステーション、社会福祉協議会、子育て支援センター等の機能をこの施設に集約した。

災害時に避難者支援や負傷者のトリアージと救命救急に対応できるスペースを敷地内に確保し、十分な容量の非常用発電機を備え、電気、灯油、LP ガス、木質ペレット、太陽光など多様な熱源を採用して、災害に備えている。

▲2011（平成 23）年 4 月 17 日 公立志津川病院臨時診療所がベイサイドアリーナ駐車場に開設された。東北大学病院、国境なき医師団が開設のため力を注いでくれた。

▲2011（平成 23）年 6 月 1 日　登米市立よねやま診療所の一部に入院病床 39 床の公立志津川病院開設。

▲2012（平成 24）年 4 月 1 日 沼田に仮設建物が完成。日本赤十字社の支援を受け、仮設公立南三陸診療所が開設された。

新たなまちへ④

失われた命を悼む

▲2012（平成 24）年 3 月 11 日　ベイサイドアリーナで開かれた東日本大震災南三陸町追悼式。　撮影　浅田政志
大きな祭壇に手を合わせる小学生たち。先生方が声をかけるまで子どもたちは手を合わせ続けていた。

2011（平成 23）年 3 月 11 日に人生を奪われた人が、そばにいない悲しみは癒えることもなく、何年が過ぎても涙が枯れることもない。

11 日の月命日に、人々が集まる度に、住民たちは黙祷を捧げ、犠牲になった人々の死を悼んできた。明日を生きるはずだった人々を思い、彼らに恥じない生き方をしよう、震災前よりさらにいい町をつくろうと、幾度となく彼らの前に誓ってきた。

私たちは、隣人たちと事ある毎にその悲しみを共有しながら、復興の歩みを一歩一歩進めて来た。

私たちの心の中に、あの日旅立った人たちは今もなお生きている。そして、彼らは日々を懸命に生きる私たちを叱咤激励し支え続けている。

私たちは今日も、死者と共に生きている。

▲2011（平成 23）年 4 月 11 日　町役場仮設庁舎の前に整列して黙祷を捧げる役場職員たち。

▲2011（平成 23）年 8 月 11 日　袖浜で行われた追悼集会「南三陸の海に思いを届けよう」で、これまで近づくことが怖かった浜辺に人々が集まった。

新たなまちへ⑤

未来を歌に～戸倉小学校

子どもたちひとりひとりの実体験から「小さな幸せ」の歌が生まれた

▲2012（平成24）年２月　戸倉小学校４年１組のみんなは、先生が書いてくれた黒板の歌詞を見ながら、毎日歌の練習をしていた。（当時授業を行っていた登米市の善王寺小学校の教室で）

写真提供　トヨタ子どもとアーティストの出会い

「小さいけれど大きなしあわせ」
作詞作曲　戸倉小学校４年１組

家族に会えたとき　しあわせ
電気がついたとき　しあわせ
水道が出たとき　しあわせ
友だちとひなんして
ごはんを食べた
自衛隊のおふろに
のびのびはいった

学校が始まったとき　しあわせ
ランドセルもらったとき　しあわせ
たきだしが来たとき　しあわせ

ラーメン　カレー
かき氷　たこやき
牛どん　ソフトクリーム
フライドチキン　やきいも

エグザイル　エーケービー
きよはら　ジュディ・オング
サンドウィッチマン　コロッケ
サンプラザ　エソラビト

いろんな人に会えた　しあわせ

二重とび　三重とび
わたりどり　とんだよ
鉄棒 マット運動
季節も 回ったよ

みんなで がんばったこと しあわせ
明日を生きること　しあわせ
ありがとう　ありがとう

2011（平成23）年３月11日、海のすぐそばにあった戸倉小学校の児童は、近くの高台に避難。津波が迫ると、さらにその上の小さな神社に避難して、かろうじて津波を免れた。津波に囲まれ、島のようになった神社の境内で、厳寒の夜を過ごした子どもたちは、その後も暗闇や地震への恐怖から抜け出せずにいた。戸倉地区は被害が大きく、ほとんどの子どもたちが家を失うなど、日常生活も大きく変化していた。

同年冬、戸倉小学校４年生は、１年を振り返って歌を作るワークショップに挑んだ。そのワークショップを実施できるかどうかは、先生方が慎重に検討した。震災を思い出し、子どもたちの恐怖が甦るのではないかと心配されたからだ。議論の末、あえてワークショップを行うことにした。震災後の１年を、友達や先生、家族や地域の人たちと一緒に生き抜いて来た自分たちの姿を見つめ直し、折々に感じたささやかな幸せを振り返ることは、自己肯定や記憶の引き出しを整理することにつながると考えたのである。

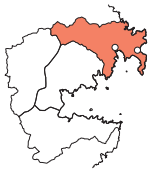
完成した歌詞の一節一節は、クラスの誰かが経験した“小さな幸せ”である。その幸せをみんなで共有するこの歌は、子どもたちの心に深く刻まれ、彼らの心を癒し続けた。結果的に子どもたちの心の傷の回復につながったと、先生方は実感している。

2012（平成24）年３月11日に行われた町の追悼式で町内の他の４校の児童たちとともに曲を披露。彼らが作った曲のエンディング、「ありがとう　ありがとう」というリフレインは135人の子どもたち全員で歌われ、会場の人々はあふれる涙をおさえることはできなかった。

新たなまちへ⑥

未来を歌に～伊里前小学校・名足小学校

みんなでがんばった一年が歌になった



▲伊里前小学校の児童が作った歌の歌詞はここまでがんばってきた大人たちへのエールにもなった。　撮影　浅田政志

「ファイト！南三陸」
作詞作曲　伊里前小学校４年１組

水くみ　手伝った
支援物資　運んだ
みんなのごはん　作った
みんなでがれき　かたづけ
少ない食料　やりくり
がれきは重い
水も重い
みんなで力合わせた

仕事場なくなった
負けずにお店つくった
がんばりはたらきだした
流れた船　ひっぱった
シロウオ　サケ　とった

ホヤ　カキ　ワカメ
種を入れた
みんなで力合わせた
みんなで力合わせた
みんなで力合わせた

伊里前小学校の子どもたちは、まわりの人たちや自分たちが震災からの一年間でがんばったことを歌にした。津波で校舎が被害を受けたため、伊里前小学校で授業を行っていた名足小学校の３・４年生は、自分たちが住んでいる町の美しさ、良さを思い出して歌を作った。

「ドレミファソラシ」のカードを首から提げて、並び替えゲームを何度か行い、そこで偶然にできあがった音の配列をメロディーにし、みんなで出し合った歌詞を当てながら、リズムを決めて歌を作った。

自分たちの体験や思いそのものが歌になった。

この時期に一年を振り返ることが子どもたちを不安にさせないか、歌作りをする意義があるのかなど、先生方の懐疑的な意見もあった。しかし、その心配は吹き飛んだ。子どもたちが作った歌には、家族や地域の人たちが頑張る姿のたくましさやふるさとの美しさが詰め込まれていた。子どもたちと先生方は毎日のホームルームの時間などに、この歌を熱心に練習した。子どもたちの歌声は、力強く自信に満ち、大人たちの心を揺さぶった。

▲児童数が少ない名足小学校だったが、３・４年生の歌声はひときわ大きく響き渡った。　撮影　浅田政志

「しあわせなみんなのまち」
作詞作曲　名足小学校３年１組＆４年１組

海がキラキラ　けしきがきれい
緑がいっぱい　桜もさいてた
やさしい人がたくさん住んでる
お年寄りはとても元気
ネコもいる

おいしい給食
毎日サッカー
さかながいっぱい
あわびもいっぱい
ふねにワカメ
ドッサリのってる
ホタテ　カキ

新たなまちへ⑦

復興の槌音が響く町に病院ができた！～志津川小学校

新しい病院に子どもたちの歌声が響いた

▲発声練習中。

写真提供　トヨタ子どもとアーティストの出会い

2015（平成 27）年 11 月 25 日、高台に新しい病院が完成し、記念式典が行われた。病院建設に貢献した多くの招待客の前で志津川小学校４年生が自分たちが作った歌を披露した。途中にのりのりのラップが入る楽しい歌だ。

町内の至る所で復旧、復興工事の土埃が立ち、ダンプが行列を成し、建設工事の音が聞こえてくる町の姿、そして、その町で家族や人々が頑張る姿を、子どもたちが出し合って歌詞を作った。並び替えゲームで音の並びを決めてメロディーにし、歌詞に当てた。

活力あふれる子どもたちの歌声が、住民の健康と生命を守る施設の門出を祝福した。

「みんなえがおに」
作詞作曲　志津川小学校４年１組・２組

1
景色はどんどん変わっていくよ　道は渋滞
三陸道だってお店も家も　できたできた

ダンプは行列　土運び　風の中　ずっと
暑さの中でがんばってる
工事のおじさんありがとう

RAP
みんなでがんばる　南三陸
復興目指し　力合わせる
役場で働くお父さん　ごはんを作るお母さん
アカモク煮てるおばあちゃん
漁師バリバリおじいちゃん
バイトをしてるお兄ちゃん
草刈りしてるおじいちゃん
野球をがんばる高校生　会社で働くお父さん
ペンキやさん　消防団　介護をがんばるお母さん
かまぼこ工場　弁当屋さん
習字を教えるお母さん
ダンプもたくさん　会津ナンバー
青森ナンバー　秋田ナンバー　奈良ナンバー

2
病院もできた　海が見えるよ　丘の上から
お年寄りだって　赤ちゃんだって　もう安心
毎日体を動かして　いきいきと元気に
友達いーっぱい　わいわいと
笑ってる　みんなで

RAP
みんなでわいわい　南三陸
元気いっぱい　志津川小
野球　サッカー　ピアノにダンス
大森太鼓にお手伝い
そろばん　水泳　マラソン　習字
バレーボールに吹奏楽
羽根つきだってやってるぜ！

3
みんな笑顔にしたいんだよ
さびしくなったときも
みんな元気にしたいんだよ
幸せな明日へ

▲子どもたちが普段の生活の中で見つめていた町の変化や復興のためにがんばっている人々の姿を出し合った。それは、楽しいラップの歌詞になった。

新たなまちへ⑧

行山流水戸辺鹿子躍（ぎょうざんりゅうみとべししおどり）　再生の物語

▲震災直後、避難所で鹿子躍を披露したのは、次代を担う若い世代だった。

1600 年代に、行山流水戸辺鹿子躍は現在の南三陸町戸倉地区水戸辺で始まり、５代にわたり躍り継がれたが、水戸辺では鹿子躍は途絶え、躍りは現在の岩手県一関市舞川で継承されることとなった。1991（平成３）年に行山流水戸辺鹿子躍保存会の村岡賢一会長が中心となり、舞川の保存会の人々に教えを請い、鹿子躍が南三陸町に復活した。その後、戸倉小学校の児童も練習に参加し、地域に定着してきた。

しかし、東日本大震災で再び危機が訪れる。水戸辺が津波に襲われたのだ。一軒の家もなくなってしまった水戸辺だったが、鹿子躍の太鼓や鹿子頭、装束が瓦礫の中からひとつ、またひとつと見つかった。奇跡だった。泥まみれの装束や道具をみんなで洗い、中学生たちが中心となり、2011（平成 23）年５月の連休に避難所で鹿子躍が躍られた。見る者は涙し、勇気づけられた。

水戸辺には「奉一切有爲法躍供養也」という言葉が刻まれた石碑が残っている。鹿子躍は「生きとし生けるものの供養のために躍られる」という意味だ。

行山流水戸辺鹿子躍を通して、水戸辺の人たちは、多くの失われた命を思い、大自然の中で生かされている命の尊さを改めて知ったのである。

「奉一切有為法躍供養也」と刻まれた、地域に残る石碑の拓本。▶

新たなまちへ⑨

「命を守る」教訓を全国に伝える　殉職した仲間たちに固く誓う

▲全壊した消防署の前で手を合わせる消防長（当時）　写真提供　気仙沼・本吉広域行政事務組合消防本部

2011（平成 23）年 3 月 11 日、想定をはるかに超える巨大な津波は、内陸の奥深くまで押し寄せ、災害対応に当たっていた９人の消防職員が殉職した。

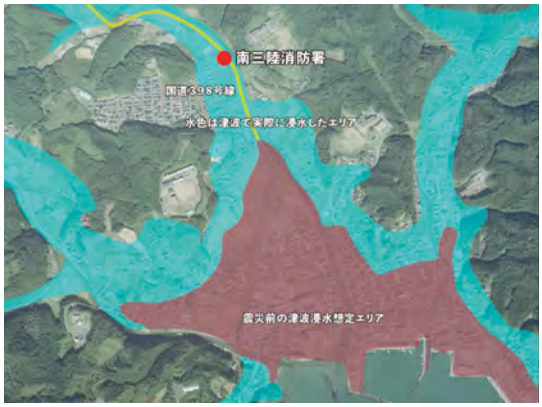
この痛ましい出来事は消防職員たちに、「なぜ仲間たちは命を落としたのか」「命の危機が迫る状況下でどう救命活動を行うべきか」という問いをつきつけた。

発災から７カ月後に発足した消防職員の津波被災事故検証再発防止委員会で、この経緯が分析される。消防職員は指令を全うしようとする使命感や目の前の地域住民を救おうとする義務感から、自らの身に迫る命の危機を感じにくくなり、撤退が遅れるという傾向があることが確認された。

自分の命があればこそ、人の命を助けることができる。救命活動は、自らの命の安全を確保した上で行われなければならないことを、消防職員たちは改めて肝に銘じた。この消防職員たちの気づきと決意は、南三陸町から全国に発信され、全国の消防署での救命活動の基本を見つめ直すきっかけとなった。

仲間を失った深い悲しみを胸に、消防職員たちは今もこう訴え続けている。

「災害は時を選ばずにやって来る。そのとき、どうか自分の命を大切にしてほしい。」



▲当時の南三陸消防署は浸水想定エリアの外側に位置していた。　国土地理院撮影写真

新たなまちへ⑩

手がかりに目を凝らして　今も続く警察官たちの行方不明者捜索

▲2022（令和 4）年 3 月 10 日　南三陸町歌津地区の海岸で行方不明者を捜索する宮城県警南三陸署員　写真提供　河北新報社

町の復興が進み、今、東日本大震災の爪痕を見つけることは難しいかもしれない。真新しい店舗や住宅、工場や公共施設が建ち並ぶ新しい町並み、海岸線の防潮堤や川の巨大な堤防が形づくる新しい景観が、大津波が町を破壊した事実を静かに物語っている。

時が移りゆく中で、今でも地道に続けられていることがある。月命日に行われる海岸での行方不明者捜索である。

南三陸町では、今も 211 人の行方がわかっていない。その帰りを家族は待ち続けている。町の風景がどんなに変わっても、あの日を境に突然会えなくなった家族への思いは決して変わらない。「どこにいるの、早く帰ってきて」その言葉を何千回、何万回繰り返しただろうか。

宮城県警は行方不明者の捜索を、今も続けている。南三陸町でも月命日に、地元住民から漂着物が多いという情報が寄せられた海岸などで、宮城県警南三陸署員たちが、石や漁具、流木などを手やトビ口でかき分けながら、行方不明者の手がかりを入念に調べている。

「一つでも多くの手がかりを見つけ、家族の思いに応えたい」その一心で、警察官たちの捜索活動は続けられている。黙祷を捧げ、懸命に捜索を続ける署員らの姿は、家族の帰りを待つ人たちの心を支えている。

2020（令和 2）年末までに県内で捜索に携わった警察官は延べ約 14 万 8,000 人に上る。